

む つ み 園

第一特別養護



(画・佐々木一人)

原爆症と闘いながら女手一つで子供を育てて

兼 安 キミヨ（八十七才）

被爆地：楠木町自宅内（爆心地より二km）

当時の急性症状：左大腿骨頸部内側骨折、手・足火傷・下痢

私は、父小田玉蔵、母はつの長女としてアメリカで生まれました。四才の時、両親と日本に帰りました。女学校を出て家の手伝をしながら、花嫁修業のため、琴、三味線を習いました。教えてほしいという人があって、琴、三味線の先生をしておりました。二十才の時結婚、子供四人さかりしましたが、子供を残して、夫は、昭和九年に他界いたしました。その後、不幸にも二人の子供も亡くしてしまいました。三十三才の時、二人の子供を連れて再婚いたし、子供六人生れ幸福に暮らしておりましたのに、四十五才の時、また、主人に先立たれてしまいました。

八月六日、朝起きて家の掃除をしていた時、小学一年生の子供が、お母さん出て見てと言

うので庭に出た途端、パーと光って頭、手と足に火傷しました。パチパチと家の焼ける音。頭の上を飛行機が飛ぶのを見ました。本家が大芝にありましたので、子供六人を連れて逃げました。子供も私も命はとりとめたものの、私は下痢が毎日続き、三か月も治らず、体力も落ちて、髪の毛も全部ぬけてしまいました。原爆症と闘いながら女手一つで子供を育て、言葉にいけない程の苦勞をかさね、戦後を生き抜いてまいりました。

現在男三人、女四人の子供がいます。皆それぞれ独立して、家庭を持って生活しております。私も四男の家族と同居していましたが、昼間は留守のため、十分な介護をしてくれる者もなく、私が希望してホームに入所いたしました。

ホームにおりますと、家族も安心しており、食事、入浴など何一つ心配することもなく、家族もたまには家に泊りに来いといってくれますが、ホームが一番良く、私の最後の安らぎの場と感謝の毎日を送っております。

里帰りの娘と孫を原爆に奪われて

堀谷　ヨシコ（八十五才）

被爆地：鉄砲町自宅内（爆心地より一・二km）

当時の急性症状：発熱、頭髮が抜ける、口内が荒れる。

家族の死亡：娘、孫

私は、父山口大蔵、母チカの長女として、広島市銀山町に生まれました。二十一才のとき、堀谷作太郎と結婚、男二人、女三人の子供が生れ、育てましたが、三女は、幼いときに病死、二男は、行方不明となりました。長女と二女は、それぞれ三原に嫁いでおりました。

被爆時のこと

八月六日、三原に嫁いでおりました二女が、孫を連れて、家に泊りに来ておりました。私は、トイレに行こうとして、廊下に出た時の出来ごとでした。あつという間に、家が壊れて、

下敷となりました。無我夢中でどうしたのかわかりませんが、一人で這い出ることができました。

娘と孫が家の下敷となっており、娘の名を大声で呼んでも、返事はありませんでした。まわりの家は、全部壊れ、すでに近くの学校は、火災がおこっておりまして。娘達が気になりながらも、近くの防空壕に避難しました。

午後四時頃、防空壕を出てみると、一面焼けてしまい、住みなれた我が家もあとかたもありませんでした。

知人と狩留家に避難して、一夜をすごしました。翌日、長女の婿が迎えに来てくれましたので、荷物を預けておりました「権現」さんに行き、そこでも一夜をすごしました。

八月八日には、三原に嫁いでおりました長女達が、心配して尋ねて来てくれました。一緒に自宅の焼跡に行き、娘と孫のお骨を拾い、比治山の多聞院に納骨した後、三原の長女宅に行き、そこでしばらくやかいになりました。主人は、鉄道局に勤務しておりました無事でした。

八月十三日、広島に帰りました。タンス等は、疎開しておりましたので、食糧を除いて当座の生活には困らず、戸坂に一部屋借りて、そこで暫らく生活しておりました。

市内の焼跡には、主人と度々足を運んでみました。八月二十五日頃から、高熱が出て、佐

伯郡平良村の田辺病院に入院治療を受けました。頭髮は全部抜けて、高熱も一週間以上続き、口内の皮膚は炎症をおこして何も食べられませんでした。医師からも一週間の命と家族に言われたと後で聞く位、生死の境をさまよう状態で苦しみました。運が強かったのでしょうか、お蔭で一命をとりとめました。

今でも、その当時のことを思いますと、原爆のおそろしさを忘れることはできません。まして、娘と孫が、家の下敷になって死亡したことは、毎年八月六日を迎える度に胸をしめつけられる様な悲しみで一杯です。二度とこの様な恐しいことがあつてはならないと強く思います。

十二月頃、ようやく体調も良くなり、退院することができました。広島駅前に、バラックを建てて住んでおりました。その後、鉄道官舎に移り住み、住居の心配はなくなりましたが、体調が思わしくなくなり、通院生活を続けておりました。

昭和二十三年に、たよりにしておりました長男が死亡してしまい悲しみが増えました。昭和二十四年に銀山町に家を建てて商売を始め、十年間続けました。その後、八丁堀の映画館東洋座隣りでカバン店をしておりましたが、主人が、昭和四十一年九月にガンで死亡いたしました。そのうえ区画整理となり、一人での商売は困難となり、十二年間続けた商売もやめてしまいました。

ホーム入所前後

商売をやめてからは、他家の手伝いなどをして、生計を立てておりましたが、身体も弱くなり、先が案じられ、知人の勧めもあってホーム入所を希望しました。

現在、ホームに入所して、生活に心配もなく、ゆきとどいたお世話をしていただき、感謝の毎日を送っております。

瓦礫の山に呆然とたちすくむ

天 津 キクノ（八十二才）

被爆地：吉島町自宅内（爆心地より一・六km）

当時の急性症状：ガラスの破片で負傷

家族の死亡：なし

私は、比婆郡実留村で、父小森音介、母スエの二女として生まれました。二十一才の時、天

津梅吉と結婚、子供には恵まれませんでした。

被爆当時のこと

夫を勤めに送り出し、家の掃除に取りかかった時、原爆が投下され、ピカッと光るとともに轟音、その瞬間家は倒壊して下敷きとなり、ガラスの破片で負傷しましたが、軽症でした。主人も、勤務先で被爆しながら、私の身を案じ、直ちに帰って来てくれて、怪我はなかったかと声をかけてくれた時は、大変嬉しくお互いに生きていた事をよろこび合いました。

主人と二人で、知り合いのいる祇園町へ、今思うと何処をどうして行ったのか、無我夢中でしたので、はっきりとおぼえておりません。祇園町へ向う途中、怪我をした人の行列で、どの人も全身皮膚がむけてたれさがり、水を下さいと叫ぶ者、男女の区別さえつかぬありさまでした。被爆の悲惨さは、今でも脳裏にやきついております。

先ず、祇園町にたどりつき、しばらく厄介になったのち、私の故郷比婆郡実留村の実家に帰り、約八か月間世話になりました。

焼野原に只々呆然

いつまでも実家の世話になるわけにもいかず、昭和二十一年三月に被爆前に住んでいた広

島市吉島町に帰りましたが、焼野原でみるかげもなく、瓦礫の山に只呆然と立ちすくんでしまいました。気を取りなおして、主人と二人で瓦礫を取り除き堀建小屋を建てて、主人の勤めておりました丸新醬油に、主人・私共々勤務させてもらいました。

ホーム入所前後

夫は、昭和四十年に、ふとした病がもとで他界いたしました。子供もなく、私は寂しい一人暮らしの生活が続けておりましたが、昭和五十一年頃より病氣勝ちとなって、入退院をくり返す生活でした。病弱のため体力も日増に衰え、一人で生活することが困難な状態となりました。民生委員の配慮を得まして、昭和五十七年一月三十日に原爆養護ホームに入所させていただきました。入所した当初は、住み慣れた我が家の事が色々と思ひ出されて気になりましたが、今は、ホームの生活にも馴れて安心して毎日の生活を楽しんでいます。

家の下敷、夢中で這い出して

中 川 ツ 子（八十二才）

被爆地：羽衣町社宅屋内（爆心地より一・七km）

当時の急性症状：なし

家族の死亡：なし

私は、熊本県芦北郡で、四人兄妹の末子として生まれました。両親は、木賃宿をしており、小学校卒業後、家事の手伝いをしておりました。二十二才の時、海軍の軍人だった中川喜代太郎と結婚、長崎に新居を構えました。昭和十九年二月十八日に、夫が広島三菱造船所に勤務することになり、広島市羽衣町の社宅に入居いたしました。

私は、羽衣町二三四の職員社宅十七軒位の管理をしておりました。あの日、主人は、造船所に出勤しておりまして、長女と私の二人が家におりました。あつと言う間に家は全壊して下敷となつてしまいました。どうして這い出して助かったのか、夢中でしたので、今でも生きておられることが不思議に思います。

家は全焼してしまい、長女は、頭に怪我をしておりました。どれ位時間がたったのかわかりませんが、三菱造船所より船で、主人が迎えに来てくれました。中島小学校に行っていた子供達が、服はぼろぼろとなり朝出ていった姿とはまるで違った、いたましい格好で帰って来ました。主人と共に子供を連れて造船所に避難し、工場の中で、板の上に毛布にくるまって生活しました。そのうち子供達二人は熊本県に、次女は長崎県にそれぞれ疎開させ、造船所の中で一週間位暮らしました。

主人が勤務しておりました関係で、観音の三菱造船所でお世話をしていたとき、貧しい生活でしたが、三十年もの月日がたちました。主人は、原爆が原因かどうか分かりませんが、昭和四十二年に肝硬変で亡くなりました。

子供は、次々と独立して家を出て行き、私は一人で恩給で生活しておりました。長男夫婦と一緒に生活しようと言ってくれて同居していましたが、その頃から体調が悪くなり、子供達に迷惑をかけたくないと考えた末、自分でホーム入所を希望し入所いたしました。入所当時は、歩いておりましたが、だんだんと足が弱くなり、今では寝たきりの毎日を送っております。寮母さん達にお世話になり、入所させていただいたことを、とてもよろこんでおります。

身体中ガラスの破片で負傷して

西岡 アキノ（八十一才）

被爆地…田中町屋内（爆心地より一・二km）

当時の急性症状…頭部を打つ、身体中ガラスの破片で負傷

家族の死亡…なし

私は、安芸郡原村の農業、父平田喜三郎、母節代の長女として生まれました。尋常小学校を卒業して、農業を手伝うかたわら、裁縫、生花、花道を習いました。二十才の時、広島市荒神町で指物大工をしておりました大谷秀一と結婚、長男静夫が生まれましたが、長男が四才になった時、夫が死亡いたしました。長男を十一才まで養育していましたが、出戻りの義姉に、長男は養育してやるから、実家に帰って再婚するよう勧められ家を出ました。三年位、広島市の兄嫁の所で、仕立物などをして働いておりました。三十五才位の時、西岡好と再婚、広島市田中町に住んでおりました。

被爆時の状況

八月六日午前八時十五分、私は、B 29が飛来したので防空頭布をかぶり、避難しようとした時、外にパーと光の線のようなものが走り、二階建の家が倒れてその下敷となりました。ガラス障子が壊れ、全身五十か所にガラスの破片が入り負傷いたしました。

夫は、建物疎開の監督をしておりましたが、当日は、朝早く仕事をすませて、家に帰っておりまして。家の瓦が落ちかかって、背中に大きな穴があき、出血多量でした。



(画・宮本二三夫)

二人で、倉庫に大事に保管しておりました米、油、酒を持ち、歩いて比治山に避難いたしました。比治山救護所に行きましたが、当時、唯一の薬でした赤チンもなく、薬を塗布してもらえず、簡単な診察のみでした。私は尾長町に、夫は竹屋町の久保医院にそれぞれ三日間お世話になりました。三日後、夫と待合せて、国鉄安芸中野駅まで歩いて、八本松まで汽車に乗り、賀茂郡原村の妹の所まで行き、八月末まで厄介になりました。

九月三日に夫と私の二人が発熱し、三カ月間、西条の国立療養所に入院治療を受けました。十二月初め退院しました、妹の所へ戻り、農業を手伝っておりました。

十二月二十三日、知人の広島市竹屋町、久保医院の二階を借りて、そこでお世話になりました。

被爆後の生活

昭和二十一年の春、広島市田中町に家を建てました。身体も大分良くなり、夫は水道工事に、私も妹の家の手伝いをしたりの平穏な日暮らしが出来るようになりました。

入院治療しておりました夫が、昭和五十七年六月、槇坪病院で死亡いたしました。私も、五十七年四月、増田病院で治療中に脳内出血で倒れてしまいました。四、五日自宅療養した後、槇坪病院で入院治療を受けました。五十七年の九月に西条の本永医院に転院加療後、右

半身マヒも固定したため、昭和五十八年十月に退院いたしました。

退院後は、西条の姪の所で厄介になっておりました。姪も家の都合で面倒がみきれなくなり、再婚後、全然往来のなかった長男静夫に連絡、話し合った結果、長男が身元引受人となってくれて、昭和五十八年十二月二十日原爆養護ホームに入所いたしました。

現在は、病気になっても心配もなく、介護も涙が出る程うれしく、至れりつくせりの生活に満足しております。

二度と原爆は嫌です

天 野 可寿枝（七十七才）

被爆地…千田町広島電鉄本社内（爆心地より一・七km）

当時の急性症状…ひたいに火傷

家族の死亡…なし

私は、父天野政治、母ユキノの二女として竹原市仁賀に生まれました。女学校卒業後は家事

を手伝っておりました。二十四才の時、結婚。夫とあこがれの満州に渡りましたが、昭和四年に夫が死亡いたしましたので、満州から広島市に引揚げ、原爆当時は、広島電鉄に勤務しておりました。

被爆当時のこと

八月六日の朝、警戒警報のサイレンで急いで防空壕に避難いたしました。間もなく解除となり、甥は学校に、一足おくれて私は、広島電鉄本社に出勤しました。会社の中庭で社長の訓辞を受けている最中、ピカーと光ると同時に建物がくずれるような大きな音がしましたので、建物の影に身をかくしました。暫らくして気がつくと額に二銭銅貨ぐらいの火傷をしておりましたが、大したことはありませんでした。医務室で治療してもらい、友達と一緒に逃げようと表に出ましたが、一面瓦礫の山で、途中喫茶店の主人が妻が柱の下敷きとなっているので助けてほしいと頼まれましたが、女の私達の力ではどうにもならないので「ごめんさい」と言ってお通り過ぎました。今でもその時のことは忘れることはできません。

市内を歩いて逃げる途中、焼死体の人を沢山みました。道路には軍隊の自動車が大鼓のよな腹をして方々に転がっておりました。原爆の悲惨さを嫌という程まのあたりにしました。今もはつきりと思ひ出して、二度とこのようなことがあつてはならないと思います。

友達とは、顔面が血だらけで、天野さんどうしようかと涙声を出しますし、どこに避難しようかと相談し、一応大河に決め、やっとたどり着きますと婦人会の方々が、馬鈴薯をたいてもてなして下さいました。そのいもの美味しかったことは、涙が出るほどうれしかったです。

自宅に帰ろうと思いましたが、一面火の海で、方向も見当がつかず、大河の友達の家に行くことにしました。友達の家は焼け残り、なんとか生活出来ましたので、暫らくそこで生活しました。友達の家を捜して、広島市内や似島まで方々をたずね歩きました。

終戦の日に、仁方に行く舟に便乗させてもらって、仁方で一泊した後、明朝郷里の竹原に帰りました。父や甥と十一月下旬頃まで竹原で暮らし、広島市に帰って広島電鉄に復職いたしました。

ホーム入所前後

昭和二十七年頃、唯一人生き残りました甥と一緒に卵の卸業を始めました。本当に苦しい生活の連続でした。甥の死亡後、一人暮らしをしておりましたが、心臓発作が起きたりしますので、心細くなりホームに入る決心をしました。昭和五十七年入所以来、車椅子の生活ではありませんが、何とか自分の事だけでも出来ますので、毎日感謝の生活を送っております。

「助けてください」と叫んだ女子事務員を

助けることができなくて

二 宮 千 歳（七十五才）

被爆地：広島市小町33番地・中国電力本社内（爆心地より〇・七km）

当時の急性症状：下痢、脱毛、齒ぐきの出血

家族の死亡：なし

被爆して

広島市小町の中国電力株式会社本社の一階事務室で、仕事をしておりました時、被爆。一瞬のうちに爆風で吹き飛ばされ、意識を失ってしまいました。

どのくらい時間がたったかわかりませんが、身体が熱くなって、意識をとりもどしました。私の身体の上には、机・椅子がたおれかかり、下敷となって、身うごきのできない状態で

した。あたりは暗く、花火のような閃光が飛びかい、火の海となりました。

全身の力をふりしぼって這い出しました。その時、暗くて誰だかわかりませんでした。女子事務員が、足をつかんで「助けてください」と叫んでおりました。私一人ではどうすることもできず、手を離して、夢中で裏庭に出ました。今でも、女子事務員を助けることができなかった事は、残念で、忘れることができません。

通用門から電車通りに出て、西練兵場に向う途中、市内電車は、鉄骨を残して焼けおち、自動車も裏返しとなって焼けただれておりました。国泰寺の楠の大木下の坂道にさしかかった時、おばあさんと孫らしい人が、抱き合って黒こげとなっておりました。見るにたえない悲惨さに、目をそむけて通りすぎました。

おそいかかる火と黒煙の中を、西練兵場にたどりつきましたが、ここも火の海で、全身まっ黒に焼けただれ、皮膚のたれ下がった人、血まみれとなった人々が沢山集まっておりました。

ここも安全でないため、また、力をふりしぼって北に向って歩き出しました。山陽本線の鉄橋の上には、上り貨物列車が、爆風で、橋巾一ぱいに横だおしとなり、積荷の野菜がこぼれ落ちておりました。おそるおそる鉄橋を渡り、ようやく饒津神社にたどりつきました。しばらく休んでおりました時、突然、強い風が吹いて、大粒の雨が音をたてて降りました。

段原の自宅に帰りつく

雨もあがり、大須賀町、的場町を通つて、大廻りをして、くたくたになりながら、十七時頃、やっとの思いで、段原の我が家に帰りつきました。

家は、玄関を残して、崩れおちておりました。妻は、被爆時、家の中におり、爆風で庭に吹き飛ばされましたが、幸いにも怪我もなく無事でした。

玄関で、雨露をしのぎ、食糧は町内会の者同志で分け合い生活しました。

二、三日して、段原から比治山を越えて中電本社に行く途中、比治山の広場には、沢山の死体が山のように積み重ねられておりました。その中には、動く人もおり、死んだと思つて処理されたものかわかりませんが、なんともいえない光景が、今でも脳裏に焼きついております。また、山の谷間には、兄弟と思われる二人の子供が折り重なつて死んでおりました。

比治山から電車通りに出ると安佐郡から市内にし尿の汲取りのため来ていたものと思われる牛車が、そのままの状態で焼けこげておりました。

中電本社に行つてみますと、ガラス窓は全部壊れて、内部は焼けただれ、あちこちに焼死体が横たわつておりました。アルミの弁当箱は、アルミがとけて中の御飯は黒ごけとなつておりました。階段には、外に避難しようとした職員が、折り重なつておりました。中には、

金齒などから、同僚の職員とおぼしき人もみうけられました。

一週間ぐらい段原で暮らした後、佐伯郡津田町の妻の実家に行きました。その頃より、連日下痢が続き、歯ぐきから出血、頭の髪はもとより、まゆ毛まで抜ける状態で、生死の境をさまよいました。

妻の実家で、二年間苦しい闘病生活の後、広島市内の親せきの家に間借りして、中国電力に出勤できるようになりました。

原爆のおそろしさを、いやというほど目のあたりにして、二度とこのような事がおこらないよう祈らずにはおられません。

この世の地獄を目のあたりにして

栗 原 弘 武（七十四才）

被爆地：皆実町比治山橋の側（爆心地より二km）

当時の急性症状：下痢

家族の死亡：なし

両親は、広島市皆実町で、時計店を開いておりました。私は、中学卒業と同時に、父親に仕事を習い、家業を受継ぎました。昭和十六年、三十一才の時結婚し、男一人、女二人の三人の子供をもうけました。

被爆時

比治山橋の石垣の側に立っていた時に、ピカッと光り、その後、あたりが暗くなって、大きな音がしました。どれ位時間がたったかわかりませんが、昭和町の方から沢山の人々が、光線を受け、衣類等焼けてぼろぼろとなり、皮膚はたれ下がって、とぼとぼと橋を渡って来るのを見ました。それはこの世の地獄でした。私は、外傷はありませんでしたが、被爆後、下痢状態が、一週間位続きました。

被爆前は、時計店を営んでおり、被爆時家屋は全壊し、お客さんから預かっておりました修理品の時計は、入れ物と一緒に飛び散り焼失してしまいました。

右目に傷を負った父、私、妻の三人で、妻の実家である畑賀村に逃げました。一か月位世話になりましたが、居ずらく、皆実町二丁目に空家をみつけて、再び、時計の修理を始めました。今度は、他の時計店が預かった修理品を修理する毎日が続きました。頑張つて、また、元の場所、皆実町一丁目に、家を建てて商売を始めようと励みましたが、思うようになりま

せんでした。

被爆後の生活

昭和三十一年、四十七才の時、脳溢血で倒れてしまいました。経済的に苦しかったため、入院も出来ず、自宅療養を続けておりました。

その内、妻が学校の給食婦をしながら、五人家族をやしなってくれました。私の病気のため、妻を働かせることが、男としてとても苦痛でした。

昭和三十二年に、原爆被爆者の医療等に関する法律が成立、入院費が不要となりましたので、古江町の永田病院に入院し三年位治療を受けました。院長が死亡されたため、草津病院に転院いたしました。そこで六年、七年位入院治療を受けました。

おかげで、体調も良くなり、退院の許可が出た頃、市役所から、原爆養護ホームのあることを知らされるとともに、入所を勧められて、昭和五十六年十二月に入所し、現在にいたっております。

今では、ホームでの生活にもすっかりなじんでおります。息子達が、家庭の雰囲気味わってもらいたいと、何度も外泊をと迎えに来てくれますが、ホームが一番良いと外泊を断っております。

歩行器使用ではありますが、自分のことは何とか出来ますし、毎日、テレビを見たり、新聞を読んだりの楽しい日を送っております。

原爆で夫を奪われ女手一つで子供を育てて

橋 本 ヒフミ（七十四才）

被爆地：河原町屋内（爆心地より一・五km）

家族の死亡：夫

生 いた ち

私は、父林真治、母カトの長女として、豊田郡瀬戸田町に生まれました。十三才の時、父が他界いたしました。二十二才の時、伯母の世話で十二才年上の東京生命広島支店に勤務しておりました。橋本清磨と見合結婚いたしました。六人の子供に恵まれましたが、三人は死亡いたしました、五人家族で生活しておりました。

被爆當時のこと

被爆当時、二人の子供は、山県郡と瀬戸田町にそれぞれ疎開させておりました。夫は、日直と宿直が続き朝食をとるため、会社から七時過ぎに帰って来ておりました。朝食の用意は、まだしておりませんでした。警戒警報発令となり、夫はすぐ会社に引返しました。夫の帰りを待つておりますと、ドカンと大きな音がして、外は暗くなり、家の屋根が爆風でふきとばされました。

私は、かすり傷ですみましたが、子供は頭に怪我、手に火傷をしておりました。早く逃げなくてはと、火事だ、火事だとさわぐ声を聞いて、着のみ着のまま、ぞうりもはかず、子供の手を引いて、いそいで家を飛び出しました。

住吉橋の所まで逃げていきますと、火が近づき、まわりの材木が燃えあがって熱いので、舟の中にあつた布団を頭にかぶり、住吉橋の下に夕方までおりました。川の水が増えて橋の下におられなくなり、土手にあがりましたが、ぞうりをはいていなかったので、釘で足に怪我をしてしまいました。足の痛みも忘れ避難先が、楽々園となっておりましたので、己斐まで歩き電車に乗り、五口市駅に下車して、傷の手当をうけました。夫を捜して五口市町内の避難場所をいくつか当りましたが、みつかりませんでした。三日後、家に帰りましたが、家

は焼けてしまい、持ち出した物は何一つなく、もらつた着物を子供に着せ、私は、身体にゴザをまいて夜を過しました。

数日後、主人の会社のあつた場所に行つてみました。焼跡には、黒く焼けた死体、水をくれと叫ぶ者、子供が母親を探して泣き叫んでいる悲惨な光景をみました。会社の入口に「東京生命に關係ある人は、八月十三日にお集り下さい」との貼り紙を見て帰りました。十三日に行つてみますと、夫の同僚の方がおられ三千円貰いました。そのお金で、竹原の伯父の所に行き子供を預けました。私は広島に帰り、尾長の伯母の所で弁当を作つてもらい、又主人を捜して宮島方面まで行きましたが、消息はつかめませんでした。

九月二日、瀬戸田に帰り、子供を預けて再度広島に行きまして夫の行方をたずね歩きましたが、とうとうみつきありませんでした。いつまでも探してもおられず、瀬戸田の旅館で十年間働き、苦勞しながら、女手一つで三人の子供を育てました。

子供も成長し、下の子が高校生となつたので、その子を瀬戸田に残して、廿日市の温泉旅館で働いておりました。過勞で体をこわし、目もだんだんと悪くなりましたので、原爆病院に半年間入院いたし、退院後、瀬戸田に帰りました。

高校生の男の子も学校を中退して働くようになりました。目も少しくなりましたので、近所の手伝をしながら、三十六年に三原のマッサージ学校に入学、二年間の勉強を終えて、

瀬戸田でマッサージの仕事をしておりました。

ホーム入所前後

一人暮らしの私も目も悪く、年をとるにつれて、娘も心配をし、知人にホームのことを聞いてくれて入所をすすめるため、昭和五十七年に思いきって入所を決めました。

今は、感謝し、カラオケクラブに参加したり、行事のある時は、唄や踊りに興じております。子供を連れて苦しかった当時がうそのような毎日を送っております。